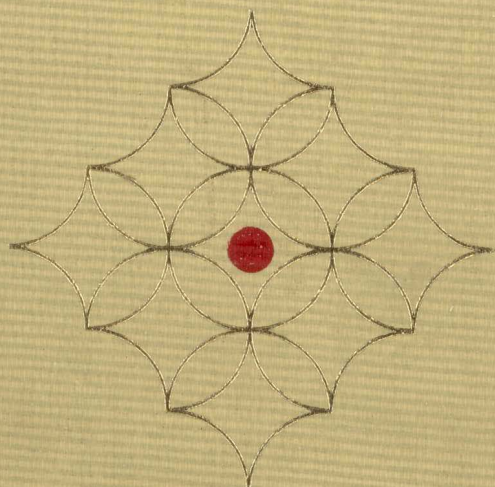




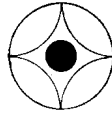
現代日本文學大系

61

林 房 雄 保田與重郎 集
龜井勝一郎 蓮 田 善 明



筑 摩 書 房



現代日本文學大系 61

昭和四十五年十二月二十日

初版第一刷発行

林房雄・保田與重郎
龜井勝一郎・蓮田善明 集

著者

発行者

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京二九一七六五一

振替口座東京四一二二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10061 (出版社) 4604

林房雄集 目次

巻頭写真
筆蹟

獄中記(抄)	三
転向について	二四
勤皇の心	四〇
狂信の時代	五三
作家のために	六〇
文学のために	六四
絵のない絵本	七三
四つの文字	八三

龜井勝一郎集 目次

巻頭写真
筆蹟

転形期の文学(抄)	五
人間教育(抄)	二三
信仰について(抄)	二五
美貌の皇后	一五九
上代思想家の悲劇	一六五
現代歴史家への疑問	一七三

保田與重郎集 目次

卷頭写真
筆 蹟

他界の觀念	二〇五
今日の浪漫主義	三〇
日本の橋	三七
戴冠詩人の御一人者	三三
物語と歌	二五
風雅論の歴史感覺	二二

蓮田善明集 目次

卷頭写真
筆 蹟

詩と批評	二七
鴨長明（抄）	三七
神韻の文学（抄）	三五
有心（今ものがたり）	三五
〔付録〕	
近代主義と民族の問題	竹内 好 三三
日本浪漫派批判序説	橋川 文三 三七

現代詩への二つの支点

—小林秀雄と保田與重郎 安東次男 四〇九

林房雄論（抄） 三島由紀夫 四一七

亀井勝一郎

—その信仰と美と 利根川 裕 四二三

保田與重郎論 川村二郎 四三〇

蓮田善明とその死 小高根二郎 四三六

年譜 四三七

著作目録 四三二

林
房
雄
集



『西郷隆盛』最終巻原稿の下書き

獄中記 (抄)

第二部

(昭和九・十年——静岡刑務所)

第一信 (十一月二十五日)

市ヶ谷では、紙風船を三千あまり、読書三四冊、それから、富士を右手にながめながら五時間の旅——去る十七日、静岡におちつきました。

市ヶ谷は、いかにも仮の宿という感じで、あわただしいことこの上なかったが、やっと宿がきまって、気が楽になりました。なによりなのは暖いことで、なんでも気候は日本一とかのこと、市ヶ谷での凍傷が三日たたぬうちになおってしまったのにはおどろきました。このところ毎日小春日和にめぐまれています。

からだは丈夫。二度目のことだから調子はずさず、万事順調に行っています。外から持越しの風邪は三日目になおり、一週間目あたりから、頬に健康色があらわれてきました。というのは、市ヶ谷で、入って間もなく、戒護主任によびだされたが、それが豊多摩で顔なじみの、そら、繁子も知っている、いつもニコニコした太った主任で、いろいろの話の末、「ほう、子供も二人になりましたか、そういえば、後藤君も年をとりましたね、この前の時は、頬も赤くてまだ少年だったが」という。房にかえると鏡があったので、うつしてみると、なるほど頬の色がなくなつて、白ちゃけた顔色になっている。知らぬ間に

僕も年をとったのだなと思っていると、一週間目あたりから頬に赤い色がかえてきて、いい顔色になったではありませんか。アルコールとニコチンがぬけ、早寝早起きが、顔色を若がえらせたのですね。考えてみると、あらゆる文士的不規則のために、僕、大病の一步手前まで行っていたのかもしれない。だとすると、危いところできいてめて下獄のおかげで長生きができます。お母さんの言葉でいえば「ものは考えよう」!

ただ心細いのは、本をよめぬこと。読みたい本がなく、その上、部数が制限されている。時間は、一日三時間ほどは都合がつくから、本さえあれば相当よめるのですから、ひとつまた行刑局に行ってくれませんか。テーヌの「英文学史」と「バイロン全集」(東京の古本屋ですぐ手に入るでしょう)を許可してもらいたい。いろいろ考えたが、まずこの二つを読むことにきめました。ハインによって「青年」を書き、バイロンによって「壮年」を書こうという心がまえです。「壮年」の腹案についていえば、全曲は三部に分れるが、その第一部の筋はすでにできあがり、今釈放されても、ただちに筆をおろすことができます。「壮年」全曲にくらべれば「青年」は、量においても調子においても、まさに序曲にすぎません。いかに壮大なロマンスができあがるか想像がつくでしょう。この準備のための註文、おもいだすつもりですが、今は、まず「バイロン全集」を入れることに全力をあげてください。

繁子の手紙は、第九信まで市ヶ谷でよみました。いろいろありますが、う。お母さん、伯母さん、両彦君大元氣とのこと、なにより。子守を雇うことも賛成。貯金とぼしく心細いでしょうが、まあ頑ばってください。そのうちに出ますからね。

昨夜、繁子と二人で、昭彦をあんよさせた夢をみました。昭坊。ピリケンみたいな顔をして、しきりに歩く。夢の傑作を一つ紹介すると——なんでも英彦の誕生日らしく、方々から盛んに贈物が到来します。たいいていお菓子で、チョコレートもある。お父さん、しきりにバクつ

きながら、チョコレートは、やはりモロゾフのより中村屋のいいねなどと贅沢をいうと、たちまち中村屋製がどこからともなく到来する騒ぎ。最後に大きな箱がついたので、あけてみると、なんと直径一尺以上もある飾り菓子が三つも入っている。しめたとばかりに、二つに割り、英彦と半分わけにしてパクリとかじりついたとたんに眼がさめた。

さて、眼がさめれば、毎日封筒貼り。やや熟練して、一日千枚まで漕ぎつけたが、この三倍ほどにならねば、まだ一人前ではないとのこと。さすがに腰がいたくなりますよ。宇都宮の「彼は今ごろ何をしているか？」には「毎日腰をさすりながら、ゲートルになるのはやめにして、ユウゴウになることにしようかと考えている」と答えておいてください。文学のことを思えば闘志猛然。しかし、これは抑えに抑えて、ひたすら封筒これ努めています。日本浪漫派論は、十二月の手紙にゆっくり書くことにしましょう。

のびにのびた最初の手紙で、しかも臨時発信なので、思いあまって筆足らず、話したきこといろいろこれあり、この手紙つき次第、どうぞ面会にきてください。お願い申します。

なおジイド全集(評論を三冊ほど)を、面会のために持参してください。

第二信(十二月十六日)

今月は封筒三万六千枚、仏教聖典、一茶句集など。だいたい浮世をはなれました。部屋は南向き、空さえ晴れた日なら、眠くなるほど暖く、飯もうまく、頼もますます赤く、繁子の手紙はたびたびくるし、これで部屋の隅にパイロン全集さえこがっていたら、それこそ弥陀の浄土そのままなのだが！

今のところ、書物の流通はきわめて悪く、この一カ月は、毎日仏教聖典とにらめっくら、せっかくの読書時間が染めず、はなはだ難渋

いたしました。

教師師が好意をもって周旋してくれているから、来月あたりからは、もっと楽になりましょう。

パイロンを早く手に入れてください。私本はいっさい行刑局の許可を経ることになっているので、願いを上げたり下げたりしていると、早くとも一カ月はかかるのです。さて、テーヌ以下五冊は受取り、これが許されるか否かは、来月末わかります。

手紙は、二十一信まで。御祐筆精励毎度大儀に存じます。繁子の手紙がつくと、部屋がきゅうに賑かになり、英彦活躍、昭彦微笑、お母さん悠々と羽をのばし、繁子と伯母さん、しきりにいそがしがっているありさま、手にとるごとく、さらには、先輩知友の消息から、遠く文壇の情景まで詳しくわかるので大助です。百二十通になったら、御褒美は望みのものをさしあげます。留守居役のいそがしを充分察しています。こちらも独座十五時間、十二時間労働の身の上。いそがしさはお互いのこととして、一頑張りいたしましょう。出所の上は、かねての御希望どおり上京、大東京の真中に居をかまえて、大健闘の心がまえ。この前は、鎌倉、伊東と西に向って落ちて行き、万事消極的な態度をとったが、今度は、「壮年」の第一回分ができ次第、都に攻めのぼり、文芸復興第二期のために、大あばれにあはれるつもり。文芸復興は、かねての宣言どおり十年計画、僕の下獄で終ったのではさらさらこれなし。第一期は、いわば文学の自己主張の時期で、文学一般を非文学から区別する運動でした。雑誌「文学界」のグループが、この時期を代表しました。この期、約一年間に、新人の輩出、旧人の復活著しきものあり、とやかく説をなすものはあったものの、文学者の間に新しい自覚をよびましたことはうたがいない。第二期は、これから始まり、文学の自己整理、自己昂揚の時期というか、自然、問題は文学の内部にかえってきます。新しい文学流派の活動が始まり、正宗白鳥であろうと宇野浩二であろうと、もはや容赦されなくなるでしょう。おそらく、日本浪漫派の運動は、この時期の開始を示すもの

です。

浪漫主義をもって、ただちに反現実主義と解するのは、学生文学史の常識にすぎません。(ペーラーフエンの浪漫主義、「レ・ミゼラブル」の作者の浪漫主義が、反現実主義と何の関係がありましよう) 浪漫の真精神は、世俗への反逆であって、すなわち新しき現実の追求と創造にはかならず、すべてこの運動が起るのは、若い世代の中に蓄積された文化的精力の爆発によるのです。古い「現実」の泥沼に四つばいになりながら、リアリズムのお経をよんでいる「現実主義作家」たちが文壇に充満しているとき、新しい「現実」の大地に足をつけて、高く大空と太陽を仰ぐ作家たちの浪漫運動は起らざるをえないのです。浪漫精神は、一言にしていえば、高貴と激烈です。高さと激しさです。高い憧憬、激しい熱中。高い誇り、激しい怒り。高い孤独、激しい異端。高い教養、激しい哀愁。高く激しい俗世嫌悪！

これを浪漫の真精神とすれば、日本の現代文学は、いかに長い間、浪漫精神を忘れていたことか。浪漫精神は、文学の故郷です。忘れられた故郷です。文学の再生を理想とする精神が、この聖地の回復を目ざして集り始めたという事実は、まことに喜ばしい当然です。長く叫びつづけられて、しかも誰もその原因を知らなかった「純文学の衰微」の真因は、じつは浪漫精神の欠如にあったことに、僕たちは、今気がつくのです。

浪漫主義という名は、現文壇の士からは、おそらく嘲笑されるでしょう。が敵にきらわれる言葉だけが、僕らの護符になります。日本浪漫派は昂然とその旗印をまもりつづけるべきです。

この運動は、また小説復興をも意味するし、浪漫派についてはいいたいことが多いが、すでに亀井、保田君たちの仕事が始まっているとすれば、僕は安心して、バイロンを読み、ロマン「壮年」の構想にふけていていいと信じます。

道元禪師曰く「文学の人は吾我のために文学を学することなかれ、ただ文学のために文学を学すべきなり。我が身心を一物ものこさず放

下して文学の大海に回向すべきなり。なしがたく忍びがたきことも、文学のためならばいってこれをなすべし。しいてなしたきことも、文学の道理なるべからざることは、放捨すべきなり。文学修業の功をもって、かわりに善果を得んと思ふことなかれ。名を捨て、利を捨て、いっさい諂うことなく、万事なげ捨てればかならずよき文学人となるなり」

リアリズムの祖師とあおがれながら、しかも、リアリズムを嫌悪したフローベルの名を思いうかべつつ、この一句をはるかに日本浪漫派の人々におくります。

さて、気焔はこれくらいにして——あと半月でお正月。英彦は三つ、僕は三十三。たびたび主人不在のお正月をさせて相すみませんが、おそらくこれが最後でしょうし、それを楽しみにめでたくおとしをとってください。お正月は、こっちも一週間ほど免業、いろいろ御馳走もあって、存分本もよめるはず。そっちも遠慮なく御馳走をたべて、ゆっくりしてください。繁子も正月七日の間は手紙をかかなくていいです。そのかわり、七日から十日までの間に面会に来てください。この手紙に書きのこしたことは、全部そのとき話します。

面会時間はみじかいが、夢ではよく繁子に会います。お母さん、両彦君、ヴェラ公にもお眼にかかります。昨夜などは、ヴェラが猫の子を生んだりしたいへんでした。宇都宮姉弟と四人で、「アラスカ」に昼飯をたべに行こうとしたとたんに眼がさめたり、淑ちゃんも満洲汁粉なるものを食べに行ったこともありまう。猛犬に吠えられて弱っている川端康成があらわれて助けてくれたり、小林秀雄と講演会にでたり、深田久弥を僕の設計した庭園に招待したり、夜ともなれば、まことにいそがしい。

なにしろ、夜中に五度は眼をさますので、そのたびごとに夢をみる。いそがしいはずでしょう。いつかは中村さんの宅にあそびに行き、芝生の上に椅子をもちだして、ラヂオの放送をきいていると、ストラヴィンスキイ風の音楽につれて、それこそ阿片の夢のような情景が庭

の上を流れてゆきました。中でも傑作は、小生、水中拳闘大会なるものに出席し、強敵三名をノック・アウトして、一等賞をもらった夢。三番目の選手のいかにも手ごわそうなのが、苦もなくまいったので、あとで聞くと、なにしろ水中のこととて、こむらがえしをおこし、手も足も出なかった由。一等賞品はタオル一本、場所は、伊東の温泉プールによく似ていました。

お正月賀状を書くなら、三申、秀湖両先生、宇都宮の徳ちゃんはじめ、本、手紙をいただいた、小林、川端、平田、島木、霧子さん、山田の奥さんその他の諸君にどうぞよろしく。

今日は、休日で、さつき教誨堂に出きました。四級になったので、共同教誨に出れるのです。三級になると、入浴も増し、発信も月二回になります。そうなれば、親族諸君にも返事をかくから、返事のほしいものは、今のうちにせいぜい手紙をくれるように煽動しておいてください。さらに二級になると、ノートとペンが入り、発信は一週一回、万事おどろくほど楽になるのだが、これはいつのことやら。二級のマークをつけている者を見ると、ほかのことはとにかく、ノートとペンだけはうらやましくなります。

第三信（二月二十日）

パイロン、ディッケンズ、ジイド、その他願ひだした本、全部許されました。万歳万歳、いろいろ御苦勞様でした。これで書物飢饉も終ったし、腰をおちつけて仕事にも精だしましょう。この二三日、少々寒い、そんなことくらい我慢する。

春遠からじ、春遠からじ！

獄中三度目の正月。今年の正月が一番暖かった。大晦日は氷雨、夜中に目をさましたら土砂降り、夜明けに雷がなったそうだがそれは知らず。朝起きて窓を眺めたら、鉄格子のちょうど真中に有明の月がひかっていた。日がのぼると同時に、ぼかぼかと暖かく、とうとう日中

温度六十度にまで上ったとのこと、六十度といえば、六月の氣候でしよう。この調子の暖かさが月半ばまでつづいたので、花壇には、バラ、金盞花、ゼラニウム、撫子花、菊の花、みんな霜枯れぬ花をのこし、新しく蕾を咲かせるのものもある。ここは日本の温室らしい。興津に国立園芸研究所があり、また坐漁荘で西園寺公が長生きしている原因がわかったでしょう。

正月の御馳走は例年のとおりだからあらためて報告せず。二日は初夢。楽しみにして寝たところ——なんでも夏のことらしく、素っ裸になって座敷に寝ころび、同じく素っ裸の英彦をからかっていると、柱が何かに頭をぶつつけ、わあわあ泣きだす。腹の上のにせて、お舟よんこさつさをやってやると、機嫌をなおして大ニコニコ。うしろから、昭彦がはってきて、英彦につかまったが、そばからお母さんがあわててだきとったので、どうしたのですとたずねたら、だってお前、昭彦が英彦のオチンコをつかみかけたからさ、で大笑いになり、眼がさめても笑いがとまらず、真夜中一人で声をたてて笑いながら、少々お行儀が悪いが、一家大笑いの初夢はめでたいぞと思いました。翌る三日に、両彦の肖像入り一家総動員の年賀状がといたのも、めでたし、めでたし。

近ごろ夢をみるのが上手になり、仲間にはたいい会ったが、武田の顔をみないから、ひとつ会ってやろうと思つて寝ると、はたしてその晩、かの麟太郎と銀座八丁をおおいに飲み歩く。途中でさめた惜しい夢も、よし続きをみてやれと眼をつぶると、おしまいまで見ることができ。どうしたわけだか、五六人を相手に大喧嘩しておおいに勝った夢をまた今月も見た。傑作は川端康成の葉書。文字もたしかに「小生もついに人の子の父と相なり申候。万歳御唱えくだされた云云」と書いてあったから、すなわち出産通知さ。今月の芥川賞はこれにきまった。

さて現実の物語にかえって——今年は昭和十年だが、指を折ってみると、僕が最初に捕って、大学の制服制帽のまま京都に護送されたの

が大正十五年すなわち昭和元年だから、ちょうど十周年になる。この十年間、ずっと被告であり囚人であり、四年間は留置場、未決監、刑務所におり、六年間は保釈で外にいたわけだ。警察は十六カ署、裁判も十数回、刑務所は、京都、市ヶ谷、豊多摩、千葉、静岡の五カ所よくまあ小説を書く暇があったものだ。十年間、一日として「青天白日の身」であった日がなかったのだなと思ったら、我がことながら、ちょっとおかしくなったよ。考えてみると、京都での六カ月間は、じつに多情多恨の囚人だったね。年は二十四だし、何しろ日本治安維持法最初の犠牲者だし、その上刑務所生活の一つ一つが未知で神秘で、壁の上の一本の光線、窓から舞いこんだ一枚の花びらにもいちいち意味があったものだ。二度目のときは、「独房書簡」が示すとおり。だがあるにしても、三度目の今にくらべると、おおいに詩がある。今は、三十三歳で、二人の子供の父親で、刑務所のことは、たいてい知りつくしたし、独座幽窓下の朝夕も、はなはだ散文的たらざるを得ない。昼間見る夢が少ないから、夜見る夢が多くなるのかもしれないね。四度目に入ることがはたしてあるだろうかいないだろうか時々考えるよ。「今度出るときこそ、十年ぶりの青天白日だから、これで刑務所道楽は若い人にゆずることにしますかね」と教誨師に話して笑ったが、どうぞそうあってくれますように！

今日でちょうど三カ月目だが、刑務所の味というのは、三カ月目あたりから、ほんとにでてくるね。ちょうどここで娑婆から持ちこした雑念雑慾が、生理的にも抜けてしまふらしい。参禅や参籠も三カ月ころから味が出はじめるのではないかと思う。身体から俗氣が抜けて、胸が冬の空のように澄んでくる。一度澄んだ空が、やがて憂いによって銀色に曇ると、曇った空から銀色の粉が、眼に見えないこまやかさで腹の底に降りつもの。毎日毎日降りつもの。この銀色の粉が大切なのだ。それは知識に反省が加って生ずる智慧の粉であることもある。怒りが自制によって浄化された批判的精神であることもある。きわめて微量なものであるが、それは知識とか思想とか、そんな常識的

な安易な言葉で現わせるものでなく、もっと尊いものだ。この尊い精神の銀色の降りつものが、すなわち三カ月目ころから始まるので、それで、苦しいはずの独房生活がふしぎに楽しくなってくる。苦しい、苦しい。今でも僕はなおいに苦しい。だが、外にいる人には説明してもわからぬ一つの楽しみがある。だから、外にいて俗職業と放逸の中に自己の空虚を感じはじめると、まじめな意味で独房が恋しくなるのだ。粉雪がつもって、腹の底にひろびろとした銀色の野原ができると、その野原に、まったく思いがけないときに、雪割草の花がぽっかりと一輪咲く。この楽しみを人は知るまい。自分の身体の中に花の咲いた喜び。人は知るまい。その花を大切に育てあげる喜び。

今部屋にある本は、「聖書」「孟子」「エピクテタス語録」。昨年の暮から今まで、これら三千年前の聖賢の書の中に埋れていたのだ。書物飢饉のために止むを得ずであったが、しかしなおいに有益であった。特に聖書がおもしろかった。何度目かの読みかえしのはずだが、まるで始めて読むような気がした。この前のときには、旧約がおもしろかったが、今度は新約の福音書に心を捕えられた。旧約では伝道之書だけは三度くりかえした。十八日によいよテレーヌの「英文学史」が入ってきた。さっそく序説を読み、バイロンの章を読み、それからディッケンズの章を読むつもりだ。たしかに名著だ。ブランドスとはちがった意味の激しさがある。今月は本官では「老子」と「莊子」を読むつもり。

エピクテタス曰く「汝もし文学に心を傾けんとすれば、俗衆に嘲笑されて「汝いずこよりその傲岸なる額を得来るか」といわるるを覚悟せよ。ただ汝の最善と信ずるところを守り、あたかも神によりてそこに置かれたるがごとくせよ」(今月の格言)

「文学界」の目次はおもしろかった。いい人が集っているではないか。小林が頑張っているのがわかるよ。僕の出るころまで続いてくれるといいがなあ。もっとも、そのころまで無事につづけば、当分倒れる心配もなくなくなるはずだから、ここ二三号が大切なのだな。なんにも助力

できないのが残念だ。この雑誌は、僕の下獄が近づいてから出はじめた雑誌だから、最初から思っていた十分の一の力もだせず、何度も休刊させてしまったが、それが小林の手で、正しい方向に蘇りかけたのはうれしい。こうなると川端康成も元気をだして身を入れることだろう。——まあ、あせるまい。もうあとわずかだ。一月たてば春もくるし。

ヒデヒコハ、ウラヤマシイナ。シラヤナギヤ、フカタノオジチャマカラ、オカシヤ、オモチャヲ、タクサンイタダイテサ。ババニモ、ヒトツ、ウマウマチヨウダイ。

オバアチャンノ、オハナシハ、オモシロイダロウ、オハナシノタネガ、ナクナツタラ、カマクラノ、ナカムラサンニ、童話全集ヲ、アズケテアルカラ、オクッテイタダクノダネ。ソレカラ、チクオンキハ、ヤッバリ、キイタホウガイイゼ。オバアチャンノ、セイガクダケデハ、ジセイニ、オクレルカモシレン。アキヒコニモ、ヒトツ、ペートオフェンヲ、キカセテヤロウジヤナイカ。セカイノメイキヨクハ、キカナイヨリモ、キイタホウガ、イイニキマツテルサ。

アソブヘヤガナクテ、コマツタラ、ゲンカンワキノヘヤヲツカウサ。コイズミノオジイチャマハ、ベッソウジュウノ、ドノヘヤヲツカッテモイイト、ナンドモオッシャッタノダカラ、エンリョスルナ。アキヒコトフタリデ、カキマワセ。パパモカエツタラ、テツダッテヤル。

第四信（二月十五日）

耳、どうやらなおつたらしい。まだ、少々へんなのだが、つんぽになるようなことは万々あるまい。つんぽになっても、第九シンフォニーは作れるから心配ない。脳膜炎になつては困ると、痛んでいる最中は、しきりにそんなことを考えたよ。

「青年」やと出たようだね。しかし、改作で普及版で、友情出版で

印税七分で千五百部なら、出さぬ方がましだ。島中社長の予言どおり、「蛇蜂とらず」になつたね。田村には、僕が非常に怒っていると、宇都宮には、僕がはなだ嘆いていると伝えておいてくれ。（だが、この話はすっかりあきらめた。「壮年」を正しく成功させれば、「青年」もあらためてふりかえられることだろうか）

今月は、へんに筋のとつた夢ばかり見た。秀潮先生に会って、市ヶ谷で「山水と歴史」を読みました。先生の本は、全部いただいているが、自分の仕事に直接接用のある本、たとえば、「財界太平記」「富豪発生物学」「西園寺公望伝」「左傾児とその父」などは、たしかに熟読したが、その他は散説に止まっているので、かねがね相すまぬと思っていたが、これで一冊精読の分が増えてたいへんうれしい、今度からは、川魚や植物やブヤベーズの話がでて、ちぐはぐな返事はいたしません、としきりにあやまった。木村さんに会って、「壮年」の筋を詳しく話し、参考文献を貸してくださいとたのんだ。木村さんは、大きな声でわっはっはと笑つたよ。人物の配置があまりに大衆文芸的にできすぎてゐるからだそう。その次の晩あたりは、ノートをもつて、東京の下町をしきりにしらべてまわつた。浅草橋、雷門の通り、すなわち最初に瓦斯灯のついた街と大川端の情景が、開巻早々必要だからだ。さて、ある晩は、まことに久しぶりに村山トム夫妻にめぐり会い、おおいに快談した。合同劇団の成功を祈つたのはいとして、僕、もつともらしい口調で忠告して曰く、劇団を成功させようと思つたら、けつして一人二役を演じてはいかん。村山知義原作脚色演出並びに舞台装置なんて芸当は堅くつしむべきだ。一人一役を原則として、仲間の才能をそれぞれ生かしてやらねばならぬ。仲間の才能を尊重することは、結局、自分を生かすことになる云々。トム、わかつた、わかつたといひ、それから二人でおおいに飲み、トム屋根にのぼり（現実の世界では屋根登りは僕の専売だが）たちまちころげおちたが、幸いに怪我はなかつた。（トム、壽子さん、怒るな、夢の話だ）。中野重治にも会つた。おおいに詩について論じた。森鷗外でさえ、「四十面さ

「詩を作ったのだから、我々が詩を作らぬ法はないというのだ。みなそれぞれ一理窟のある夢だろう。どうしたわけかな。また、これも酒席で、小林秀雄が、誰かをつかまえて、しきりに名論をはいっている。里見さんが僕をふりかえって、「どうも小林という男は、独房には向かんね」とだしぬけなことをいう。「え？」とききかえすと、「独房では相手がいないから名論もはけまい」——この夢は筋の通ったような通らぬような夢だな。そうかと思うと、字野千代さんの肝入りで踊りの会が開かれることになり、僕と繁子とは「タップ・ダンスを加味したメニエット」なるものを踊ることになり、というような与太なのもある。上落合の伯母さんが、パンテージ・ショオがどうしたこうしたというモダンな手紙をくれたせいだろう。もつと目のさめるのがおそかったら「洋服を着た川端康成」の姿なんかも現れたにちがいない。紀元節以来ずっと暖かい日がつづいている。バラの葉のび、ボケの花がさき——ここは春も早いらしい。何よりも幸いだ。お母さんの初日より拝見。書けば手紙も上手なのだから、これからはせいぜい書いてくださいよ。お母さんといえば、川端さんには活動をみせてもらうし、村木さんには、大人の玩具をいただくし、このところ大当りですね。

両彦の写真たしかに見ました。(ただし十六分間ほど)。二人とも元気なのなにより。子供っていいものだな。マッチを貼りながら考えていると、心がほのぼのとしてくるよ。

仕事、封筒工を失業しマッチ工となる。煙草にそえてくれるあの小さな赤いマッチを、一日に千二百十個つくらねばならぬ。封筒百万、日本の通信文化に若干の貢献をしようと思った雄図が空しくなつて、今度は専売局と火災保険会社に奉仕することになった。糊仕事で、お母さんのいうとおり、寒中は少々つらいが、仕事に変化があつて、封筒より「趣味がある」！

今月はテニスであけてテニスでくれた。聖書よりもこまかい二段組、全五巻だから、二宮金次郎のように勉強したが、まだよみきれない。

一種の文学百科辞典だから、得るところが多い。いい本にぶつかったと思つている。小説ほどにおもしろい文学史だ。僕もし五十をすぎても余命があつたら、日本の青年子女のために「小説ほどにおもしろい日本文学史」を書きたいな。日本文学は、少くともその歴史においては、ヨロップにけつして劣らぬほど豊富だよ。ただ、いい文学史はまだ書かれていない。

横光利一が「純粋文学にして通俗小説」を主張はじめたのはいいね。へんに揚足をとる必要はない。これは才能と力量のある若い作家の今日の目標だ。「従妹ベツ」ほどに通俗になつてみる。たれも通俗小説だとはいえないからう。これが僕らの目標だ。「白痴」と「悪霊」の作者の狙つたのも同じのだと僕は思う。横光もそれをいつているのだ。「純文学にして通俗小説」という言い方は変だが、横光が、今さら菊池寛になろうと考えるはずはないのだから、ここである通俗はバルザックの通俗さ。「狭小にして卑屈、猥雑にして低調なる生活に、たいした考察も加えずに書きなしたものが私小説、そのうちで人物の少いのが心境小説か、ああ！」という現状から踏みだすためには、どうしてもこの城の一廓を攻めなければならぬ。特殊化して萎縮した文学を、時代の一般的関心の中に押しもどすのだ。大学卒業生と女学校卒業生とを同時に読者として征服するのだ。ほかに道はない。「盛装」が成功するかもしれないが、それは知らぬ。だが、たとえ失敗しても、横光の目標は間違つてはいない。第二第三の試みのために、僕は彼力につづく。——いつか書いた「小説復興」というのは、この意味の努力のことさ。

そこでは、外国人の小説家としては、ディッケンズ、バルザック、ドストエフスキイに学びたいと思つている。この三人は文学的に事実上血縁のつながりのある三つの巨像だ。「純粋文学にして通俗小説」の偉大なる作者だ。三人の代表作を二三冊並べて読めば僕のこととはすぐわかる。ただ(これも読めばわかるが)この三人は、三人とも偏執狂の病状があり、猛烈な、ほとんど病的な想像力をもっている。

この点は生得で、天才で、ちょっと真似ができぬ。はなはだ残念なことだ。

小林にバイロンのお礼をよくいってください。バイロンは来月あたりから、三カ月ほどかけて読みあげる。そのあとはもっぱらディッケンズを読む。それで今度の留学も終りだ。この前出たときのことを、武田は「まるで生れかわったようになって帰ってきた」と書いていたが、今度もまた生れ代る。この前は、だいぶ聖化したのが、今度はおおいに俗化する。その方が質に合ってるさなど、悪口をいうな。俗化も時に大きな進化さ。この意味は川端康成が一ばんよく知っている。

平田小六はおもしろいね。今からぼつぼつ新進作家だとかなんとはいわれて文壇がおもしろくなってくるはずのところを、いきなり文壇的空氣に息をつまらせて田舎に帰って行ったのはなかなかいいよ。この人には、どこか全身的なところがある。

中村光夫の時評はつづいていけるね。僕の出るころには、立派な評論家になっていることだろう。楽しみだ。

徳永直がしきりに変なことをならべるらしいが、彼の頑固さは偽せ物さ。作家同盟末期の事情を知っているものは誰でも、いかに彼が小心翼翼として「危険」をさけ文筆稼業を守ったかを知っている。(僕は、少くとも徳永のような逃げ方はしなかったよ)。彼が今さら唯一の非転向プロレタリア作家顔をする義理はないのだ。さらに僕や亀井や島木やその他の仲間にも悪名をきせる資格はまったくない。よくしらべてみよ、彼の作品のいったいどこに、真の頑固さがあるか。数少ない労働者出身作家のことだから、大切にやらねばと思つて、今まで何をいわれてもだまっていたが、彼もいつまでも後輩扱いは不意だろ、うし、工場生活から足を洗って作家生活も五年たてば遠慮もいるまい。十月になったら、はつきりしたことを申しあげよう。

今晚はライス・カレーが食えるよ。どうだ、おどろいたろう。カレーは月に一度くらい顔を見せるがなかなか一般に評判がよろしい。いつも二三日前から前香がつたわって、連中いつもニコニコする。僕も

悪い気持ではない。それにしても、家のカレーはうまいなあ。あいつを食いたくなつたよ。

今月手紙運わるく、三十八、四十信をうけとただけ。繁子の手紙なし。残念。今からたくさんくるのかな。

ヒデヒコハ、オオキクナツタナ。オドロイタヨ。アキヒコノ、サンバイアルジヤナイカ。エライモンダ。イロンナコトバヲ、オボエタソウダナ。「ヨイシヨ、ヨイシヨ、オカシガホシイ」カ。コンドハ「バカヤロウ」ヲオシエテモラエヨ。ソレカラ「ナニクソ」ヲオボエルンダナ。「バカヤロウ」ト「ナニクソ」ガイエナクテハ、オトコノコジヤナイゾ。

アキヒコハ、タイヘン、オトウチャンニニテイルソウダガ、シャシンデミルト、ナルホド、ハナノアナノオオキイトコロナド、ソックリデ、ナカナカカンシンダ。オトウチャンニニルノハイイガ、オオキクナツテモ、ケイムシヨダケニハ、ハイランホウガイイゼ。フユガクルト、サムクテ、アマリイイトコロジヤナイヨ。

第五信(三月十七日)

バイロン卿去る九日の夕刻御来着。この夜、街には防空演習あり、明滅する電灯の下、高射砲の連音をききながら、ロセツチの序文を読み、「チャイルド・ハロルド」の第一頁をひるがえした。夜半をすぎで、空曇り、暴風雷雨となり、僕の腹少々痛んだ。——なにしろ五カ月かけて待ちかねた若きロード来訪の日だ。このくらいの変地異もあってしかるべしだろうさ。

以来二週間、「ハロルド」と「マンフレッド」を終り、今日から「海賊」にとりかかる。読み行くにしたがつて、僕の予想がしだいに確められるのを感じる。予想というのは、テーヌの「英文学史」のバイロンの章(この章はシェークスピアの章とともに全巻中の出色であ

る)を三度くりかえしたが、三度目に僕はテーヌのバイロン観に非常な不満を感じた。テーヌはバイロンについて多くのことを教えてくれたが、彼の見えないものがまだバイロンの中にある。しかもそれがバイロンの性格の本質をなしていると感じたのだ。ロセッチの序文も、この意味でさらにくだらない駄文章だ。全集を読したら、僕のこの予想は確信にかわるだろう。その上で、僕のバイロン論を書く。それよりも嬉しいのは、バイロンがたしかに「壮年」の主調音になることが、いよいよ明らかになってきたことだ。これを探りあてれば、すぐにも作曲にとりかかることができる。

とにかくいい気持だ。夜の読書時間が、今までの十倍もたのしい。お祝いにひとつ、「チャイルド・ハロルド」を訳してお目にかけようか。

ヴェニスなる歎息の橋の欄干にわれ寄り立ちぬ
宮殿は右手にそびえ左手は牢獄の門

眺むれば高麗あまた水の上に並べるさまの

魔術師の杖に呼ばれた波間より出でしに似れど

千年の昔偲べば黒き雲翼をひろげ

消えのこる栄光をつつみ、わが心そぞろ蝕む

ああその上の大理石の柱に彫りし翼ある

雄獅子の姿うちあおぐ国々あまた従えて

百々島の島の玉座に女王めきヴェニス栄えし日やいずこ!

有名な第四歌章の冒頭だよ。笑っちゃいかん。なにしろ、ポーブの古調を学んだバイロンの韻律正しい詩だぜ、あえてこのくらい気取らなけりゃあ感じがでないのさ。

水に浮く街の姿は神々の母なる女神
大洋とその軍勢を司るシビリの女神

櫓なす大宝冠の綾光四方を照して大らけく
今しも海を出でし姿に似たるかな。

もうすよ。たれかほめてくれれば、もとよりお調子者のことだ。

ペンとノートが許されたなら全訳するかもしれないがね。いずれにしろ、僕はバイロンを読みあげる。誰れかシェリイをやってくれる人はいないか。ハインネやる人はたくさんいるが、Stellioもまた、ぜひ地中海の波間から起して、日本浪漫派の奔流の中に蘇らせなければならぬ一人だ。どうだ、亀井君やらないか? このゴッドウインの女婿で、義父のユートビズムよりさらににはげしい思想の持主であった天来の詩人は、君のように蒲柳の質で、君のように美しい顔と姿をもっていたそう。亀井、僕は昨夜の夢で君に会ったよ。日本浪漫派が生れぬさきから、方々から叩かれたというのはいいいやないか、ますますやり甲斐があるというものだ、と僕がいったら、おおいにそうだと言った。君が答えた。もっともという話したんだが忘れてしまった。詩人小熊秀雄と作家新田潤と多才多能な神西清を同人に加えたら、日本浪漫派は賑やかになるぜといったような気もする。(このことは夢でなくとも君にいいおうと思っていたことだが——このごろの僕の夢の半分は、いいたいことしたいことを、そのまま夢に見るのだよ)

君たちはすでに出版したのだ。君たちの雑誌の目次だけは僕にもわかった。表紙に平等院の鳳凰の写真のあることも。(これは保田君が選んだのか?)日本浪漫派は自信をもってすすんでいい。僕は信じている、すべての芸術家と詩人の胸底には一本の蘆の笛が収められていることを。蘆笛は故郷の風を感じると、高くまた低くおのずから鳴りわたる。浪漫主義は、芸術と詩の故郷だ。浪漫主義の潮が河をさかのぼり、川岸に新しい風がわたりはじめるのを、詩人の胸底の蘆笛は、たれよりも早く敏感する。僕たちは、まっすぐに歩きつづけなければいい。嘲笑と攻撃は泥田の中の蛙の声のように聞きながすのだ。間もなく僕らは行く手のあらゆる叢、あらゆる森蔭、あらゆる泉のほとりで、高